

IgG4 関連涙腺・唾液腺炎に対する治療適応の検討

研究分担者／研究協力者 氏名 高橋 裕樹、山本 元久
所属先 札幌医科大学医学部 免疫・リウマチ内科学 役職 教授・講師

研究要旨： IgG4 関連涙腺・唾液腺炎における治療介入群 146 例の再燃率と経過観察群 49 例の増悪率を検討した。2017 年の 1 年間に、治療介入群（平均観察期間：約 6 年）の再燃率は 2.7%、経過観察群（平均観察期間：約 3 年）の増悪率は 10.2%であった。

A. 研究目的

近年、IgG4 関連疾患の臨床的、基礎的研究が進行している。診断に関しては、IgG4 関連疾患包括診断基準をはじめ、臓器別診断基準も策定され、容易になってきた。しかし治療に関しては、ステロイド薬が第一選択であるが、その開始基準についてはまだ混沌としている。IgG4 関連涙腺・唾液腺炎のみの場合、現在、当科では腺機能温存や IgG4 関連病変の腺外臓器への拡大抑制を期待して、比較的早期からの治療開始を行っている。しかし、後者に関しては、まだエビデンスはなく、最終判断は患者と相談し、決定しているのが実状である。そこで今回、私たちは IgG4 関連涙腺・唾液腺炎の症例を対象に治療介入群（治療群）、無治療経過観察群（無治療群）の長期経過について検討した。

B. 研究方法

SMART レジストリーに登録されている IgG4 関連涙腺・唾液腺炎 202 例を対象にした。2017 年の 1 年間ににおける治療群の再燃率、臨床的寛解によりステロイド休薬した群の再燃率、及び無治療経過群の増悪率（限局型から全身型への移行：他臓器病変の新規出現）を解析した。

（倫理面への配慮）

札幌医科大学附属病院臨床研究審査委員会の承認を得て実施した。

C. 研究結果

治療群は 146 例、ステロイド休薬群は 7 例、無治療群は 49 例であった。各群の平均観察期間は 5.83 ± 4.08 (S. D.) 年、 7.76 ± 4.66 年、 2.67 ± 2.46 年、であった。治療群の再燃率は 2.74%、休薬群の再燃率は 0%、無治療群の増悪率は 10.2%であった。

D. 考察

今回の解析により、無治療群は、約 3 年で 10.2%が新規に他臓器病変を呈することが明らかになった。治療群の観察期間を補正しても高い値である。これらのデータとともに、再燃・増悪しやすい臨床病型を明らかにし、IgG4 関連涙腺・唾液腺炎に対する治療適応を再考していかなければならない。

E. 結論

SMART レジストリーに登録されている IgG4 涙腺・唾液腺炎症例を検討した結果、2017 年の 1 年間に、治療群（約 6 年の観察期間）で

2.7%、無治療群で（約 3 年の観察期間）で 10.2%が増悪（他臓器病変の新規出現）を示した。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

投稿中

2. 学会発表

第 62 回日本リウマチ学会総会・学術集会
で発表予定。

H. 知的財産権の出願・登録状況

（予定を含む）

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

特記すべきことなし